

『野外劇 ロミオとジュリエット イン プレイハウス』観劇レポート

伊東あおい (日本大学芸術学部 2年)

今回の「野外劇 ロミオとジュリエット イン プレイハウス」は、パンフレットに記載の演出からの「ごあいさつ」にもある通り、東京芸術祭のコンセプトの一つである「ひらく」ことに特化したものであるように感じた。

安価な値段で、本来は野外という外部にも上演していることが伝わりやすい環境で、特にこれまで演劇の親しみのなかった人々に向けて、かの有名なシェイクスピアの「ロミオとジュリエット」を上演する。そのような意識が、自分がこの作品を観て最も強く感じたことである。

そう感じたのはなぜか。まず、全体的にシェイクスピア作品の多くに見られる一種の荘厳さのようなものをなるべく遠ざけているように思われた。それは例えば、上演前に現代のポップな音楽を流したり、衣裳も比較的現代的なものであったりすることに感じられる。台詞も現代風にアレンジはせず本来の言葉(訳を通してはいるが)そのままでありながら、すごく激しかったり、壮大な含みを持たせたりするような言い方をしない。あくまで、シェイクスピアの「ロミオとジュリエット」の台詞を発しているということを強調しているように思われた。

また、現代より昔のもので多くの人には親しみの少ないシェイクスピアの時代の世界観をより現代に感じやすくするために、舞台を近未来の池袋としていることも大きい。その中で元の役柄と俳優自身の性別の垣根を無くしていることは見た目にはわかりやすい特徴の一つだ。男性の役を女性が演じていることもあれば、反対もあるし、そうかと思えば役柄通りの性別の俳優が演じていることもある。

このような工夫によって、この公演は「ひらく」ことをコンセプトの一つに、主に舞台や演劇に親しみのない人々に向けて、かのシェイクスピアの「ロミオとジュリエット」を上演するというものとなっていた。しかし私は、性別のことにどうしても引っかかるものを感じてしまった。果たして今回の公演で、男女の垣根を無くすことはどれだけ意味のあるものだったのだろうか。男性が女性を演じたり、女性が男性を演じたりする中で、なぜか女性らしさ、男性らしさがより強調されていることに違和感を感じた。女性が演じる男性は、声を低くし、男らしく男を演じることを求められている。一方男性が演じる女性も、見た目も可愛らしく、裏声を使い、かわいらしい女らしさを要求されているようであった。これでは、古典的な固定観念にとらわれた男らしさ、女らしさをより際立たせるだけではないだろうか。また、性別を様々に変えている一方で、この作品が書かれた当時のジェンダー観が如実に現れている台詞がそのまま発されていることも疑問に感じた。ジュリエットの父はジュリエットに娘らしく、弱い女らしくすることを求めるし、男性の役は「男なら」というような強さを求められたりする。当時と現代とでジェンダー観に違いがあるのは当たり前だが、近未

来の池袋が舞台のはずなのにジェンダー観が当時のままである。そのままの台詞でも、他に何かしらの処理の仕方があったのではないだろうか。先日、同じくシェイクスピア原作でこちらは全ての役を女性の俳優が演じている「ジュリアス・シーザー」を観た。こちらもジェンダー観が垣間みられる台詞はそのままでありながら、役の見せ方に男性らしさを求めているなどの点からかそこに違和感を感じられなかった。近年ジェンダーの話題は高まる一方であるが、それについて触れる際はもう少しよく思慮深く、丁寧に演出する必要があるのではないかと感じた。

一方、大きな発見も一つあった。それは上演空間についてである。この作品は、本来は野外劇であったところを感染対策の観点から室内の劇場での上演になった。しかしタイトルにも「野外劇」と冠されている通り、室内劇場用に大規模な変更は施していないように思われた。私は上演を観て、「これは野外劇だ」と強く感じた。それはつまり、上演空間に適した演出、またそれを始めとする見せ方というものが確実に存在するということであると気づいた。今回はあえて野外劇と冠したままプレイハウスでの上演としたわけで、無論そういう方法もあるが、これは少なくとも元からプレイハウスで上演する作品では無いと思う。では、こうした、この劇場には適していないという感覚は何に基づいているのだろうか。今回の場合で分かりやすいのは、開場～上演前までの舞台の使い方(役者が舞台上で、練習着で会話したりストレッチをしたりしている)や、「これから、シェイクスピアの、ロミオとジュリエット、やります！」という掛け声による上演の始め方などである。しかし、もっと見せ方という点からなにか、上演空間にふさわしくないと感じたものがあるように思う。正直、それは感覚的なものでしかないのかもしれない、今解明するには簡単ではないと感じる。しかし、上演空間、もしくは条件に適した見せ方があるというのは一つ大きな気づきである。自分は舞台美術専攻だが、美術をデザインする時も最も重要な情報はどんな作品を上演するのか、そしてどんな場所で上演するのか、である。場所が決まらないままデザインを始めてしまうことはあまりないし、適当ではないだろう。今後自分が公演制作に携わる際も、より上演空間に適した形で使用するという意識を持とうと強く感じた。

講評 多和田真太良（玉川大学芸術学部演劇・舞踊学科准教授）

多くのレポートが「酷評」に終始する中で、批判する原因やそれに留まらない気づきや発見を思考の順に沿って書いている点が評価されます。特に時代設定のような視覚的演出がどのように「ひらく」という企画意図とシンクロしているかを評価した上で、演出家のジェンダー観に対する疑問と違和感の原因を具体的に分析し、「丁寧に演出すべき」とした展開は納得させられました。また大きな発見として、「野外劇ではない野外劇」に感じた違和感から野外劇の特徴と意義を見出し、上演空間について論じている優れた考察と言えるでしょう。